

保育学生による地域子育て支援の取り組み

—2011年度活動報告—

A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare

Practical Training School: A Report of the Activity 2011

幼児教育学科

澤 津 まり子
柴 川 敏 之
松 本 希
鎌 田 雅 史
Z. 山田 章子
秋 山 真理子
笹 倉 千佳弘
田 中 誠
山 根 薫 子

はじめに

本学幼児教育学科では、子育て支援を目的とした学生ボランティア団体G B A（Girls and Boys Be Ambitiousの略）を結成し2011年度で6年目を迎えた。過去5年間の取り組みについては、既に報告済みである^{1) 2) 3) 4) 5)}。

昨年度の課題として、1)「学生マネージャーの役割強化」、2)「倉庫の整理整頓」、3)「OGによる協力支援体制」、4)「5年間の総括」の4点をあげた。4)についてももう少し詳しく言えば、「現状のスタイルを維持しつつ、学生の自立性を強化する方法」として、「①真のリーダーシップを発揮できる学生リーダーの育成、②マニュアル化の徹底、③電子掲示板による情報の共有化及び蓄積など」が考えられていた。

本報告は、上記のような課題解決を念頭においてすすめてきた、2011年度における地域子育て支援の取り組みの経過及び結果をまとめたものである。

1 活動内容

1)「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」

2008年度に立ち上げた「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」は今年で4年目を迎えた。年間9回の活動は昨年同様である。公演内容及び参加者は、表1の通りである。

表1 就実やんちゃキッズ活動内容

日時	公演演目	参加人数	学生数
第1回 4月23日	パネルシアター「はたらく自動車」 リズム体操「パワフルキットちゃん」 オベレック「ポコとパコ」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 60人 子ども 77人	79人
第2回 5月28日	パネルシアター「動物園へ行こう」 リズム体操「もったいないばあさん音頭」 オベレック「おむすびころりん」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 103人 子ども 115人	94人
第3回 6月25日	パネルシアター「あめふりくまのこ」 リズム体操「マルマルモリモリ」 オベレック「しらゆきひめ」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 96人 子ども 123人	91人
第4回 9月10日	パネルシアター「いぬのおまわりさん」 リズム体操「サンサン体操」 オベレック「七ひきのこやぎ」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 137人 子ども 169人 高齢者 2人	43人
第5回 10月29日	パネルシアター「おばけなんてないさ」 リズム体操「ハッピージャムジャム」 オベレック「かさじぞう」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 105人 子ども 152人 高齢者 2人	60人
第6回 11月26日	パネルシアター「こんこんくしゃん」 リズム体操「あ・い・う！」 オベレック「あいちゃんとの出会い」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 80人 子ども 111人 高齢者 3人	57人
第7回 12月17日	パネルシアター「あわてんぼうのサンタクロース」 リズム体操「WAになっておどろう」 オベレック「ももたろう」、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 74人 子ども 114人 高齢者 5人	55人
第8回 1月21日	パネルシアター リズム体操 オベレック、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 人 子ども 人 未定	人 未定
第9回 2月18日	パネルシアター リズム体操 オベレック、幕間に手遊び 交流広場～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 人 子ども 人 未定	人 未定

今年度の特徴は、第4回より岡山県備前県民局との協働事業「行政と保育学生のボランティア活動の協働による世代間交流と地域貢献」として「就実やんちゃキッズ」を実施したことであった。どのようにして高齢者の方々に来ていただくのかが第1の課題となった。参加者

を通してのチラシにより高齢者へ呼びかける、学生からの提案を実践する、地元の町内会に高齢者参加募集のチラシを掲示・回覧を依頼する等、地道な活動を展開しているが、顕著な結果はまだ現れていない。地元だからこそ、一過性ではない、真に地域に根づく形態を根気強く模索していきたい。

公演内容については、参加する子どもの年齢は3歳未満児が多くなってきたため、よりわかりやすくするための様々な工夫を試みた。パネルシアターでは、登場人物を大きくし、パネルボードを子どもの近くに設置した。リズム体操では、即興で子どもの動きに合わせられるよう、CDからピアノ・キーボードによる生演奏を取り入れた。オペレッタでは演出効果を上げるための大道具・小道具の製作に取り組んだり、合奏隊による生演奏を交えたりした。幕間の手遊びでは、手先が目立つようカラー手袋を用いたり、お面をかぶったりして、演者により注目が集まるようにした。

また、昨年度から整備を進めている音響設備については、長期計画の途中年であるが、徐々に整備されている段階である。音響機器を有効に活用するためには、発声法や話し方等の基礎技能を向上させる日々の訓練も併せて行うことが重要であろう。

交流広場においては、今年度より赤ちゃんコーナーを設け、乳児も参加できその場の雰囲気を楽しめ、さらにその保護者同士の交流が図れるようにした。また学生が授業等で作成した手づくりおもちゃを新たに配置し、子ども達が実際に使って遊べるコーナーも設置した。伝承遊びのコーナーにはあやとり、お手玉、メンコ、独楽等を準備した。高齢者の方には座椅子を用意し、楽な姿勢で遊びや親子・学生と談笑できるようにした。

10月以降は主に、1年生が公演、2年生は交流広場という役割分担ができつつある。

2) 「出前就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」

この「出前就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」は、学内で実施する「就実やんちゃキッズ」に参加しにくい地域の親子を対象に、子育て支援の輪を拡大するとともに、学生がその地域の子育ての状況を理解することを主な目的として実施している。本活動は、G B A発足以来の恒例行事となっており、夏休みや冬休みの長期休暇を利用して行っている。本学幼児教育学科は、2年生が7月から長期学外実習のため、夏休み以降に行われる「出前就実やんちゃキッズ」は、1年生を主体とした公演である。

今年度の「出前就実やんちゃキッズ」は、4カ所で実施した。公演開催場所は岡山備前県民局管内の赤磐市、備前市、和気郡和気町、岡山市であった。公演の具体的内容及び参加者数は、表2に示した通りである。公演の基本構成は、学内で行う「就実やんちゃキッズ」と概ね同様で、前半30分間の公演と後半60分間の参加者との交流広場である。

今年度は、学生と親・子もしくは、親子同士、子ども同士の交流だけでなく、年代を越えた世代間交流も目的に実施したため、地域の高齢者の方々にも参加していただいた。地域の高齢者の方々には、たけのこの家（赤磐市）、ふれあいサポートちゃていず（備前市）、和気

町子育てふれあいセンター（和気町）を通して参加をお願いした。岡山市での活動は、JDS（財団法人日本ダウン症協会）岡山支部のクリスマス会への参加であった。本学内での公演と同様に地域の高齢者の方々が参加しやすいよう、座椅子を準備した。加えて、後半の交流広場では、高齢者の方々が経験したことのある遊びや地域に息づく遊びを子ども達に伝えることができるよう、あやとりやお手玉、メンコ、独楽などの伝承遊びのコーナーを作った。高齢者の方々はそれぞれ得意な遊びを子ども達や学生に教えて下さった。学生を介して、普段子どもとの関わりが少ない高齢者、及び同じ地域に住む子育て世代とその子どもの交流を図ることができたことは大きな収穫であった。さらに、岡山市での活動では、ダウン症児とその保護者と関わることによってダウン症についての理解を深めることができた。

表2 出前就業やんちゃキッズ活動内容

日程	会場	公演演目	参加人数	学生数
9月20日 (火)	赤磐市 桜が丘いきいき 交流センター		大人 62人 子ども 74人 高齢者 20人	50人
9月22日 (木)	備前市 寒河コミュニティ センター	パネルシアター「いぬのおまわりさん」 リズム体操「サンサン体操」 オペレッタ「七ひきのこやぎ」、幕間に手遊び 交流広場	大人 20人 子ども 22人 高齢者 12人	46人
9月26日 (月)	和気郡 和気町子育てふれ あいセンター	～おねえさんやおじいちゃんおばあちゃんと楽しく遊ぼう～	大人 41人 子ども 124人 (内73名は園児) 高齢者 14人	40人
12月10日 (土)	岡山市 JDS岡山支部 クリスマス会	パネルシアター「あわてんぼうのサンタクロース」 リズム体操「WAになっておどろう」 オペレッタ「ももたろう」、幕間に手遊び	大人 50人 子ども 66人	52人

本活動は前述した通り、1年生を主体とした公演ではあるが、会場やステージの広さ等、普段と異なる環境の中で、学生は回数を重ねるごとに臨機応変に対応することができるようになり、またその重要性を学んだようである。このような学外の様々な環境の中で実施し、成功を取めたことで達成感を感じ、自信につながっていると思われる。

2 アンケートの方法及び結果

1) 保護者へのアンケートの方法

受付でアンケート用紙を配布し、「やんちゃキッズ」終了時に回収した。アンケートでは、保護者に対し、①子どもの年齢、②子どもとの続柄、③やんちゃキッズのプログラムの内容に関する意見、④今後の参加意思について尋ねた。

2) 学生の振り返りのためのアンケートの方法

「やんちゃキッズ」終了後の振り返りの時間に、学生にアンケート用紙を配布し回収した。評価項目は、①公演について振り返り（11項目）、②交流広場に関する振り返り（10項目）、③全体に関する振り返り（2項目）の23の振り返り項目から構成されている。

3) 保護者へのアンケート結果

以下の結果は、2011年の4月23日、5月28日、6月25日、9月10日に本学の体育館2階アリーナで実施された「就実やんちゃキッズ」及び、2011年の9月20日（赤磐市）、9月22日（備前市）、9月26日（和気町）で実施された「出前就実やんちゃキッズ」で得られたデータに基づくものである。アンケートの全体の回答数は、417であった。

(1) 子どもとアンケート記入者の関係

参加した子ども達とアンケート記入者の関係について、表3に示す。記入者（言い換えれば引率者）の多くは、母親であり（約85%）、次いで父親（約8%）、夫婦（約3%）の参加が多かった。

表3 アンケートの記入者

続柄	人数	割合(%)
母	348	83.5
父	33	7.9
夫婦	14	3.4
祖母	11	2.6
祖父	1	0.2
その他	2	0.5

(2) 参加した子どもの年齢について

参加した子どもの年齢を表4に示す。兄弟姉妹で参加している場合もあるので、総数が528名となっている。1～4歳未満の子どもが、全体の約80%を占めている。中でも3歳未満の子どもの割合は、約60%である。やんちゃキッズのプログラムに适龄の子どもが参加していることが分かった。

表4 参加した子どもの年齢

年齢	人数	割合(%)
1歳未満	64	12.0
1歳以上～2歳未満	123	23.0
2歳以上～3歳未満	131	24.5
3歳以上～4歳未満	114	21.3
4歳以上～5歳未満	45	8.4
5歳以上	51	9.5

(3) プログラムについて

① プログラム全体の時間について

全体の時間の印象（プログラムの長さ）を図1に示した。やんちゃキッズは、現在延べ90分のプログラムで開催している。この開催時間の長さについて、参加者の約80%がちょうど良いと答えた。

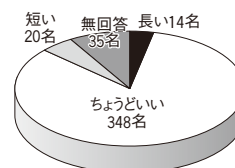


図1 プログラムの長さ

② 一番良かったと思うプログラム

保護者と子どもが選んだ最も良かったと思うプログラムを図2に示す。全体としては、交流広場を一番良かったと答える保護者、子どもが多かった。また、保護者に関しては、リズム体操やオペレッタなどについても良かったと答えていた。一方、子どもに関しては、良かつ

たプログラムの質問項目への無回答が多かった。この点に関してはアンケート用紙を改良していく必要があると考えられる。

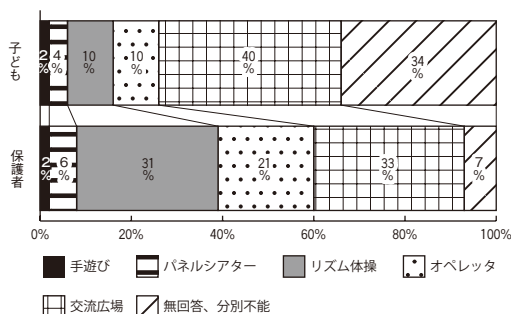


図2 一番よかったプログラム

(4) 今後の「就実やんちゃキッズ」への参加意思について

図3のように、保護者に対して「今回のような企画があれば、また参加したいと思いますか?」と尋ねた結果、ほとんどの参加者(約90%)が、参加したいと「思う」と回答した。昨年に引き続き、地域子育て支援への継続した取り組みとして、本活動がますます期待されているものと思われる。

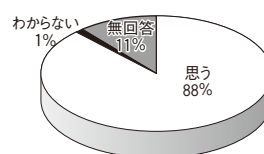


図3 参加意思

4) 学生へのアンケートの結果について

学生には、やんちゃキッズ終了後に毎回アンケート調査(「振り返りシート」)への記入を指示している。本アンケート調査は、学生自身がやんちゃキッズを振り返り、さらに問題点を抽出し、次回以降のやんちゃキッズに活かすきっかけになることを目的に実施している。アンケートでは、公演に関する振り返り10項目と交流広場での子どもとのふれあいに関する9項目、やんちゃキッズ全体的な満足度を尋ねる1項目について、「あてはまる(5点)」「少しあてはまる(4点)」「どちらでもない(3点)」「ややあてはまらない(2点)」「あてはまらない(1点)」の5件法にて回答を求めた。また、今回の公演と交流広場での活動それぞれに関し、学生がどのような課題を意識するようになったかについて自由記述による回答を求めた。第3回のやんちゃキッズまでは、1年生と2年生の混合で実施した。第4回目からは2年生は長期学外実習のため、やんちゃキッズは1年生のみで実施した。それぞれの回でアンケートに回答した学生数は、第1回(79名)、第2回(94名)、第3回(91名)、第4回(43名)、出前やんちゃキッズ(39名)であった。

(1) 公演について

学生の公演についての振り返りの得点を図4に示す。1年生のみで実施した第4回目のやんちゃキッズの振り返りにおいては、アンケート得点が低下していた。Bonferroniの多重比

比較検定を行ったところ、「人前で演技することが上手になった」の項目に関しては、第4回目とくらべて出前やんちゃキッズ後の得点が1%の水準で有意に高くなっていた。3度の出前やんちゃキッズの体験を経て、学生が公演に対する自信を身につけてきた様子がうかがえる。

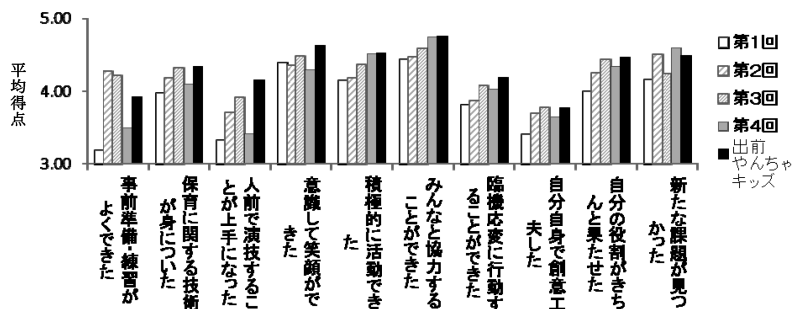


図4 公演についての振り返り

(2) 交流広場について

交流広場についての振り返りの得点を図5に示す。アンケートの平均得点の範囲は、最小値3.54点（保護者・高齢者と積極的に交流できた（第2回））、最大値4.79点（自分も楽しく参加できた（第1回））と、肯定的な評価がなされていた。また、1年生のみに注目した時、多重比較検定による統計的差異は認められなかったが、ほとんどの項目で第4回よりも出前やんちゃキッズ後のアンケートの得点の方が高い得点を示している。1年生が子ども達との関わりの中で、自らの課題を模索し、成長していくことに対する、やんちゃキッズの意義が認められる。

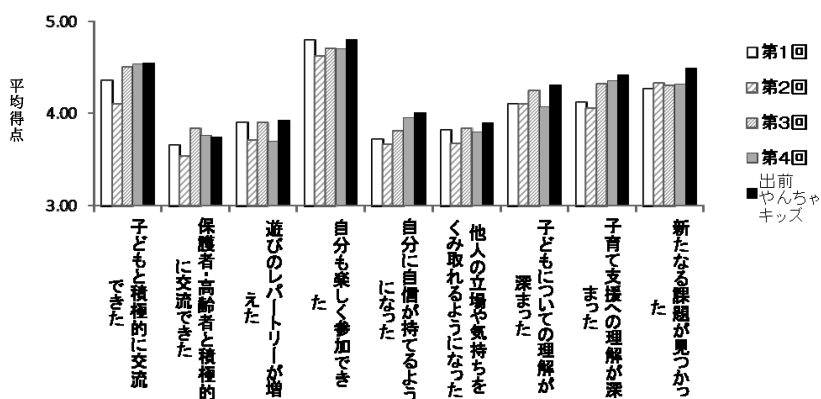


図5 交流広場についての振り返り

(3) やんちゃキッズに対する学生の全体的な評価

全体的満足度と公演及び交流広場の振り返り得点の相関値を求めた（表5）。「新たな課題」に関する2項目以外の全ての項目と全体的満足度との間に正の有意な相関が示された。特

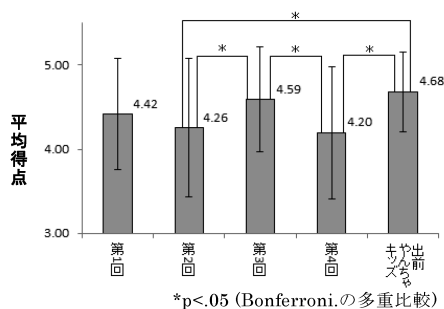
に、「他人の立場や気持ちをくみ取れるようになった (r=.51)」「子どもについての理解が深まった (r=.48)」「自分に自信が持てるようになった (r=.47)」「子どもと積極的に交流できた (r=.45)」「自分も楽しく参加できた (r=.45)」「積極的に活動できた (r=.44)」「保育に関する技術が身についた (r=.43)」「意識して笑顔ができた (r=.42)」などの項目と比較的高い正の相関関係が示された。これらの相関関係から、やんちゃキッズの活動において自分自身の成長を感じることができた学生や、活動に積極的に参加できた学生は満足度が高い傾向があることが示された。

毎回の全体的満足度の点数を比較検討したところ、初めて1年生のみで実施した第4回目のやんちゃキッズでは、第3回目にくらべて有意に低値を示した (Bonferroniの多重比較 (p<.05) (図6)。しかし、出前やんちゃキッズ後のアンケートにおいては、有意に増加している (Bonferroniの多重比較 (p<.05))。出前やんちゃキッズの活動を通し、少しずつ自信をつけた1年生が、充実感を持ってやんちゃキッズを実施している様子が伺える。

表5 全体的満足度と各項目の相関値
(ピアソンの積立相関)

公演1	事前準備・練習がよくできた	.30***
公演2	保育に関する技術が身についた	.43***
公演3	人前で演技することが上手になった	.36***
公演4	意識して笑顔ができた	.42***
公演5	積極的に活動できた	.44***
公演6	みんなと協力することができた	.38***
公演7	臨機応変に行動することができた	.37***
公演8	自分自身で創意工夫した	.21***
公演9	自分の役割がきちんと果たせた	.34***
公演10	新たな課題が見つかった	.03
交流広場1	子どもと積極的に交流できた	.45***
交流広場2	保護者・高齢者と積極的に交流できた	.30***
交流広場3	遊びのレパートリーが増えた	.30***
交流広場4	自分も楽しく参加できた	.45***
交流広場5	自分に自信が持てるようになった	.47***
交流広場6	他人の立場や気持ちをくみ取れるようになった	.51***
交流広場7	子どもについての理解が深まった	.48***
交流広場8	子育て支援への理解が深まった	.37***
交流広場9	新たな課題が見つかった	.06

p***<.001



*p<.05 (Bonferroniの多重比較)
棒グラフは各回の学生満足度得点の平均値
グラフ中の縦線は学生間の得点のばらつき
(標準偏差)を示している

図6 全体的満足度の得点の推移

(4) 自由記述アンケートの感想

本年度のやんちゃキッズは、世代間交流がテーマである。初めての試みに、どのように行っていくか戸惑っている様子も見受けられたが、回を重ねるごとに、学生達はそれぞれに課題を見つけ、よりよい交流を行おうと励んでいることが自由記述アンケートから伺えた。ここでは、出前やんちゃキッズ終了後の学生アンケートの中から抜粋して紹介する。

「高齢者の人と触れあうことができて、そこへ子どもたちも入ってきてくれてよかったと思いました。子どもが笑ってくれたのが嬉しかったです」

「回数を増すごとに、良くなっているのが分かった。3回目は、保護者・子ども・お年寄りの交流ができてとてもいい雰囲気だった。出張を通してGBAの存在がより多くの人に知っ

てもらえて良かったと思う」

「おじいちゃんやおばあちゃんに来ていただき、あやとりのやり方を教えてもらえてよかった。和気公演では、小さい子ともたくさん関わってよかった」

学生は、高齢者の方々や、就学前の子ども達、またその保護者と関わる中で、主体的に世代を越えたコミュニケーションの大切さを学んでいる。今後も、世代間交流を推進していくことに意義があると考えます。



写真1. やんちゃキッズの幟



写真2. 本学の公演；リズム体操



写真3. 本学の公演；オペレッタでの楽器演奏



写真4. 出前の公演；
交流広場での高齢者との活動

おわりに

以上、2011年度の活動を報告してきたが、それらを活動の目標に従って、次のように総括した。

1 学生マネージャーの役割強化

幼児教育学科は男女共学となって2年目であるが、今年度は男子学生によるマネージャーの強化を図る予定であった。しかし、男子学生が1学年2～3名と少人数であり、役割強化は難航を余儀なくされている。そこで各グループから大道具係・音響係を募集し、さらにはその中で学生自身が役割分担をし、学生マネージャーとして活動できるよう体制を整えつつある段階である。

2 倉庫の整理整頓

物品整理のためにスタッキング可能なコンテナを購入し、保管方法について検討及び見直しを行った。コンテナに品目シールを貼ることによって物品の保管場所及び片づけ場所が一目瞭然となった。年々物品が増えており、大道具等の保管及び収納の工夫、さらなる効率化とシステム作りの検討が急務である。

学生が保育の環境構成のモデルとして認識し、常に整理整頓を心掛けるよう指導が必要である。

3 OGによる協力支援体制

昨年度の最終回、1年間の振り返りにおいて、卒業後OGとしての協力支援を依頼した。第1回目の4月には新卒OG5名の参加があったが、その後継続されることはなかった。新卒のOGはまだ余裕がないため、卒業後3年以上のOGに呼びかけているが、まだ成果は現れていない。継続して呼びかけていく必要がある。

4 5年間の総括として、現状のスタイルを維持しつつ、学生の自立性を強化する方法

1) 真のリーダーシップを発揮できる学生リーダーの育成

リーダーの選出については、現在1・2年生とも公演グループ別に互選された中からリーダー1名、サブリーダー2名の集団体制をとっている。できるだけ多くの学生にリーダーの役割を経験する機会が得られるように、2年次でリーダーを交代している。強いリーダーシップを発揮する学生が出現しても、短大の修学期間が2年という特質を考えれば、毎年リーダーが交代することに替わりはない。また、強いリーダーが学生全体の自立性を強化することにも繋がらない。むしろ、リーダー任せになる可能性が高い。そう考えると現在のリーダー選出方法は、よい方法ではないかと思う。

その上で、学生の自立性を強化する方法は、本活動の意義及び必要性を学生が集う場で頻繁に伝え、それを共通理解として認識し、公演グループ単位もしくは個人単位でそれぞれが主体的に意義に沿った目標を持ち、それを達成できるよう援助が必要であると考ええる。

2) マニュアル化の徹底

運営面では、受付、会場設定、会場案内の役割をローテーションで分担するようにした。音響係はマネージャーの他、各グループにも複数の音響係をおき、共通理解のもとに使用するようにした。物品購入の方法についても全員に説明し、マニュアル化した。

3) 電子掲示板による情報の共有化及び蓄積など

今年度のやんちゃキッズの主な告知方法は、市内幼稚園・保育園等へのポスターの郵送と就実短期大学ホームページへの記事の掲載であった。ホームページには、各公演前に公演開

催のお知らせの記事を掲載し、各公演後には当日の公演の様様と次回開催日を掲載した。ホームページの記事を見てやんちゃキッズに参加する親子も増えつつある。また特筆すべき点は、今年度の1年生の約半数以上が本活動に参加しているが、受験前にホームページでやんちゃキッズの存在を知り、入学後に参加することを決めていた学生が多かったことである。将来のやんちゃキッズを担う受験生にもアプローチができていく点でも一層のインターネットを介した情報の発信が必要であると考えている。今年度は、電子掲示板の作成まで至らなかった。

5 その他 活動の視覚化

イメージカラーを黄緑色に統一し、やんちゃキッズのロゴマークを作成した。これらを元にポスターやチラシをデザインした。幟も同じイメージで作成し、外から見た時の目印としての役割と、高揚感を演出するビジュアル効果をねらった。



図7 ポスター (B3サイズ)

6 今後の課題

1) 学生間のグループ編成

GBAの組織編成に関しては、学生間のグループ編成人数にばらつきが生じ、プログラムに影響を及ぼしかねない事態になっている。これまでの固定観念にとらわれず、柔軟な発想による再編成も必要である。

2) プログラムの改善

今年度は世代間交流を目的とし、高齢者の方に参加していただいた。主に交流広場の伝承遊びのコーナーで活躍していただいたが、前半の特に子ども向けのリズム体操では、傍観するに留まっておられた方が多かった。今後は、高齢者が前半から参加できるようなプログラムの構築が望まれる。そのことにより本活動が継続した世代間交流の場になるものと考えている。

また、内容についても、原作を変えるのはどこまで許されるか、死にかかわる話をどう扱うか、著作権への対応などが課題として出てきた。これから学生と共に基本に戻ってじっくりと考えていきたい。

3) 増加する参加者への対応と安全確保

表1に示している通り、参加者が増加傾向にある。限られたスペースを利用して本活動を実施しているため、参加者が増えると1人辺りのスペースは狭くなる。交流広場内の動的な遊びの場では、フラフープやボールなどは場所を取るだけでなく、空間認知が確立されてい

ない子どもには事故の危険も伴うため、参加人数に合わせて遊ぶ用具を工夫することが必要である。また死角を作らないような学生の配置、実際に事故が起きた場合の対処方法を確立させておく必要がある。

併せて、会場入口付近の交通指導、駐車場への誘導等、交通安全対策の徹底も急務である。

4) インターネットを介した本活動の情報発信

インターネットを介した情報の発信は十分でない。やんちゃキッズや子育て支援の情報を発信できる環境を整え、参加者が情報交換できるような場の提供を構築したい。

引用文献

- 1) 村田恵子、澤津まり子、立石あつ子、(2006). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—備前地域子育てキャラバン事業報告— 就実論叢、36 (社会篇)、pp.135-152.
- 2) 澤津まり子、永田彰子、田中誠、立石あつ子、(2007). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2007年度活動報告— 就実論叢、37 (社会篇)、pp.81-98.
- 3) 澤津まり子、堤幸一、立石あつ子、伊藤真、笹倉千佳弘、田中誠、永田彰子、山根薫子、Z.山田章子 (2008). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2008年度活動報告— 就実論叢、38 (社会篇)、pp.285-298.
- 4) 澤津まり子、伊藤真、堤幸一、立石あつ子、笹倉千佳弘、Z.山田章子、田中誠、山根薫子、(2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2009年度活動報告—就実論叢、39、pp.233-247.
- 5) 澤津まり子、立石あつ子、柴川敏之、秋山真理子、堤 幸一、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子、(2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2010年度活動報告—就実論叢、40、pp.163-172.